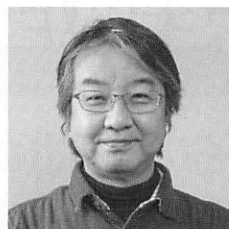


ネイチャーポジティブとは何か

占部城太郎

東北大名誉教授



ネイチャーポジティブとは、生物多様性の損失を食い止め、回復させる取組みである。この取組みは2002年にオランダ・ハーグで開催された「生物多様性条約」(CBD)の閣僚級締約国会議(COP6)で採択された「2010年までに生物多様性の損失を阻止し、反転させる」という目標に遡る。その後、2010年の名古屋CBD-COP10では、生物多様性の保全と回復を目指す愛知目標が設定され、さらに、2022年のカナダ・モントリオールCBD-COP15では、「2030年までに生物多様性の損失を反転させる」という目標が再確認された。これは、生物多様性が持続社会に不可欠という認識に基づいている。この目標達成は未だ遠いが、重要な点は目標達成のための可視化と評価手法が研究者を中心に議論されてきたことである。その核心は、「生物多様性の損失曲線を折り曲げる(Bending the Curve)」という概念である。これは、2050年までに生物多様性の損失を停止し、回復へ向かわせるロードマップでもある。

生物多様性の状況を把握する指標は複数あり、それぞれ特徴がある。その代表的な指標として次の3つがあげられる。

レッドリスト指数(RLI)：絶滅危惧種の状況を定量化し、危険度が軽減することで評価値が上昇する指標。これにより、多様性の喪失・回復状況を評価することができる。

生きている地球指数(LPI)：魚類や鳥類などの個体数を分類群ごとに算出し、その変化を評価する指標。

生物多様性保全指数(BII)：特定の地域で人為の影響がない状態と比較して、生物がどれだ

け維持されているかを測定する指標。

これらの指標値が上昇すれば、生物多様性が回復している(ポジティブ)と評価される。しかし、その算出には定期的なモニタリングが不可欠で、人為影響が少ない生態系との比較、そのための学術調査も必要となる。また、モニタリングでは、特に希少種が注目される。「個体数が極端に減ってしまった種」、「生息場所が少なくなった種」、「生息に特別な環境が必要な種」のことである。これら希少種は絶滅しやすく、その可能性が特に高い種が絶滅危惧種である。この絶滅の可能性を減らすこと、つまりそれら希少種の存続の可能性をより高めていくことがネイチャーポジティブの本質なのである。これは、だれも取りこぼさないという包摂(Inclusive)の概念にも通じるものである。

近年、意図的なのか無意識なのか不明であるが、この概念が脱炭素や循環経済などの別の目標と混同されつつある。しかし、たとえば、森林を伐採して太陽光パネルを設置し、カーボンニュートラルを達成したとしても、森林が破壊されれば、多様な生物の生息場所損失は免れない。経済が地域で循環しても、それが環境に負荷を与え希少種を脅かすのであればネイチャーポジティブとはならない。ネイチャーポジティブは、生物多様性の損失阻止と回復、特に絶滅しかねない種をそうでない状態に戻すという、厳密な目標を持つ取り組みなのである。余計な混乱を避けるためにも、この目標を明確に認識し、生物多様性の回復への取り組みを求めたい。